

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(ただし、一部を省略したり、書きかえたりしたところがあります。)

二十世紀の終わりごろから「グローバル社会」といったことが盛んに言われるようになりました。グローバルとは「地球規模の」「世界全体に関係する」といった意味ですね。大昔の馬車や籠^{かご}や船の旅が、高速列車、さらには飛行機といった交通^a。ギケン^bによるものに代わり、電報、電話の時代から、ファックス、メール、携帯^{けいたい}、インターネット、ウェブ上のSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)、インターネット電話やライブ映像配信など、通信技術がどんどん発達するにつれ、世界はどんどん「狭く^{せま}」なってきました。地球のあちこちに散らばっていた人々は、こうした乗り物やテクノロジーを使えば、すぐに集まったり、同じものを見て話しあったりすることができるようになりました。共同でなにかをする機会が増えていきます。

すると、困るのは言語の壁^{かべ}ですね。今、世界には六千プラスマイナス千ぐらいの言語があるとされています。

違う言語を話す人たちが集まったら、そして互いの言葉がわからないとしたら、必要になるのは、通訳者や翻訳者^{ほんやく}です。¹二十一世紀の今、通訳をふくめた翻訳という仕事の役割はますます大きく重くなっています。

でも、翻訳ってどんなことをするの？ 翻訳家ってどんな職業？

という内容については、イガイ^cと知られていないのではないのでしょうか。

それは必ずり言う、想像力の枠^{わく}から出ようとすること。少なくとも、出ようとする意識をもつことです。言い換えれば、人間は自分の想像力の壁のなかで生きている。そのことを忘れないことだと思います。

²二〇一一年三月十一日、東北の三陸沖を震源とするマグニチュード9.0という巨大地震が東日本を襲いました。地震の後には、うち続く余震のなか、最大二十m以上の高さの津波が町々を襲つてのみこみ、その一方で火災事故が頻発^{ひんぱつ}し、震源地から三〇四百km離れた東京の湾岸地帯でも地面の液化化などが起きました。

そして、いまなお解決が見られていない。シンコク^dな問題^eといえ、福島原子力発電所のメルトダウンと言われる事故です。くわしくは省きますが、そもそも原子力発電によって出る、放射線を発する核廃棄物^{かくはいきぶつ}は、無害なものとなるのに十万年の歳月が必要です。作った人間たち自身がそのことをきちんとわかっていませんでした。

十万年。みなさんはその長さを想像することが出来ますか？ 抽象概念^{ちゆうしやうがいねん}としては理解できますが、特別な修行^{しゆぎやう}を積んだお坊さんでもないかぎり、ふつうは「実感」でできるような長さではありません。人間の想像力には悲しいことに限りがあるのです。

東日本大震災後、「想定」という言葉がよく聞かれるようになりました。想^{おも}い定めると書く「想定」とは、つまり「想像力の壁」のことではないでしょうか。人は気づかないうちに、自分だけの想定、つまり想像力の壁のなかで生きている。こうした壁は、他人への思いやりや、おたがいの理解、理解しようとする心、さらにはギケン^eを察知する能力までを阻みます。それによってさまざまな行き違いが起き、そこからいじめ、虐待^{ぎやうたい}、ときには戦争や、シンパ^fグへの迫害、大虐殺にまでつながってしまうこともあります。

では、この壁を打ち破って想像力の枠を広げるにはどうしたらいいでしょう？ いきなり想像力だけを広げることはできません。想像力を豊かにするには、経験や知見の土台が欠かせないからです。しかし経験を広げ、知見を深めるといっても、例えば被災地^{ひんさいち}に赴^{おもむ}いてボランティア活動をするとか、世界各国を旅してまわるとか、学校を辞めて社会で働いてみるとか、そういったことには限りません。また、最も大事なことは、そのなかでいろいろな「感情」を経験することなのです。そのためには、読書というのとはとても有効だとわたしは思います。

翻訳というのは、他言語を自分たちの言葉に移すこと、書き換えることだと思われているでしょう。もちろん、翻訳とは最終的には「書くこと」です。しかし翻訳するには、まず原文(他言語で書かれた文章)をよく読まなくてはなりません。⁴訳者^{やくしや}というのは、まず読者なのです。翻訳というのは、「深い読書」のことです。

そして、なにかを読むということは、他人と出会うことです。その本や文章を書いた自分ではないだれかと対話することなのです。時には作者あるいは登場人物とぶつかることもあり、時には一体化したように感じることもあるでしょう。他者に感情的な衝突^{しやうとつ}を感じることを「反感」と言い、他者とひとつにつながったような気持ちになることを「共感」と言いますね。英語では、アンチパシーとシンパシーです。こうした感情経験の豊かさは、想像力の枠を広げることにとても役立つと思います。こうした反感や共感を経た先に、深い理解が生まれるからです。

「良い訳文を書けるようにするにはどんなことをしたらいいですか？」とか、

「訳文の日本語を磨^{みが}くにはどうしたらいいですか？」

といった質問を最近よく受けるようになりました。これは声を大にして言いたいのですが、あなたの訳文や文章だけを良くすることはできません。日本語だけをピカピカに磨くこともできません。類語辞典などをあさって、きれいな言葉やりっぱそう表現を引っぱってきても、決して訳文は良くなりません。よく訳すためには、よく読めるようになること。これに尽きます。よく読めれば、よく訳せる。

翻訳とは言ってみれば、いつとき他人になることです。個人的な好き嫌い^{きらい}や私的な感情を乗り越えた先で、実際、相手(作者)になり代わって書く。例えば、「書評」という仕事がありますね。ある文章を読んで自分なりに解釈^{かいしやく}し、その書物にどんなことが書いてあるか、本の趣旨^{しゆし}や魅力^{みりよく}や評価、あるいはその本の読み方を他の読者に示す文章のことです。翻訳にも似たような働きがあります。5 翻訳者が書評者と決定的に違うのは、その本を丸ごと自分の手で書きなおし、作者の文章を一語一句にいたるまでみずから当事者となって実体験することなのです。

問一 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a キカン

b イガイ

c シンコク

d ケケン

e ミンゾク

問二 傍線部 1 「二十一世紀の今、通訳をふくめた翻訳という仕事の役割はますます大きく重くなっています」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人々がいろいろな国を訪れた結果、外国に対する関心が高まっているから。

イ 人々は世界中の人たちと会うために、高いコミュニケーション能力を求めているから。

ウ 人々が日々発達する通信技術を使いこなすために、言語能力が必要になっているから。

エ 人々が世界中の人たちと交流し、いっしょに何かをなす機会が増えているから。

問三 傍線部 2 「二〇一一年三月十一日、東北の三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 という巨大地震が東日本を襲いました」とありますが、このことを筆者が取り上げたのはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア いまなお人々が解決できていない問題を引き合いに出すことで、人間の想像力ではすべてをとらえきれないことを示すため。

イ いまなお多くの人々が苦しんでいる問題を引き合いに出すことで、その問題の責任をはっきりさせるべきだということを示すため。

ウ いまなお人々が復興に努力している出来事を引き合いに出すことで、私たちはつらいことでも忘れてはならないことを示すため。

エ いまなお取り上げられる出来事を具体的な数値で示すことで、現実味を帯びた恐怖心が世界中に広がったことを示すため。

問四 傍線部 3 「その」とありますが、これはどういうことを指し示していますか。「こと」に続くように、本文中から十二字で抜き出しなさい。

問五 傍線部 4 「訳者というのは、まず読者なのです」とありますが、これはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 翻訳者は原文を読み、きれいな言葉やりっぱさような表現を使いこなせるようになることが大切だということ。

イ 翻訳者は原文を読み、作者や登場人物とぶつかったりしてさまざまな感情を経験することが大切だということ。

ウ 翻訳者は原文を読み、さまざまな作者や登場人物の考えを批判的にとらえることが大切だということ。

エ 翻訳者は原文を読み、さまざまな本で作者あるいは登場人物についてよく調べることが大切だということ。

問六 傍線部 5 「翻訳者が書評者と決定的に違う」とありますが、どう違うのですか。その違いを本文中の言葉を用いて七十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお文中に出てくる「マコト」とは、「ぼく」のクラスに転校してきた女子の名前です。

「最近、昼休みに屋上に上ってるひとがいるようです」

学級会の始まる前に、クラス担任の中山先生が言った。

三階建の校舎の屋上は、立ち入り禁止だ。ドアにも鍵が掛かっ

て、ぼくはまだ入学以来一度も上ったことがない。

先生は「学校の近所のひとから職員室に電話がかかってきました」とつづけた。二階の窓からたまたま校舎を眺めたら、人影が見えたのだという。

一人で、フェンスにもたれかかっていたらしい。

「まあ、見間違いだと思うけど、とにかく屋上は立ち入り禁止だからね、勝手に上っちゃだめよ」

教室は急にざわついた。

「だって屋上、鍵がかかっているだろう?」「上りたくても上れないじゃん」「幽霊なんじゃないの?」「うそーっ」「ひえええーっ、怖えーっ」……。

先生はあわててみんなを静かにさせて、「はい、じゃあ、学級会始めてくださーい」と黒板の脇の椅子に座った。

教壇に立つのは、クラス委員二人——ぼくと、女子の委員の加藤佐智子さん。じゃんけんをして勝った加藤さんが書記を選び、ぼくは司会になった。

今日の議題は、来月の社会科見学の係を決めること。

しおり係、カメラ係、見学先にクラス代表でお礼状を出す手紙係、バスに酔ったコを介抱する保健係、昼食のあとの遊びを決めるレクリエーション係……話し合いは順調に進んで、係は残り一つになった。

バスの中で歌やゲームの司会をするマイク係——男子はお笑い芸人志望

のタッチであつさり決まった。あとは、女子だ。

「誰か、立候補か推薦、いませんか?」とぼくは言った。

すると、おツボネさまが、待つてました、というふう

に手を挙げて言った。

「わたしは、高野さんがいいと思いますーす」

教室は、しんと静まり返った。
高野知香さんは、クラスの女子で一番おとなしいコで、マイクを持って司会をするなんて絶対に不向きだ。さっきの国語の時間だって、本読みの声が小さくて、おツボネさまたちに「聞こえませーん」とイヤミを言われて、泣きそうになっていた。

でも、おツボネさまは自信たっぷり

に言った。
「高野さんはおとなしいから、逆に勇気を持って司会とかやってみないと、だめだと思いますーす」

「そこが、おツボネさまのズルいところだ。」「勇気」なんて言葉を出されたら、誰も——先生でさえ、文句を言えなくなってしまう。

高野さんは下を向いたまま、顔を真っ赤にしていた。

悲しいだろうな。悔しいだろうな。高野さんの気持ちを想像すると、こちちまで泣きたくなる。でも、「反対意見ないから、決まりじゃん」と笑うおツボネさまに、ぼくはなにも言えない。

だいじょうぶだよ、と自分に言い聞かせた。タッチとコンビなら、あいつがぜんぶしゃべってくれるから、高野さん、なにもなくていいんだか

ら……。

² 高野さんから目をそらして、ぼくは言った。

「じゃあ、女子のマイク係は……」

そのときだった。

教室が、^x不意にざわついた。

手を挙げているコが、一人。

マコトだった。

「マイク係、わたし、やるから」

にらむような視線でぼくを見つめて、きつぱりと言った。

そして、マコトは同じ目をおツボネさまに向けて、つづけた。

「推薦より、立候補のほうが強いよね？」

おツボネさまは黙って、ふい、と横を向いてしまった。

その日の昼休み、おツボネさまの命令でクラスのほとんどの女子が廊下^{ろうか}に集まった。

「やべえよ、仕返しとか考えてるんじゃないの？」

ジャンボが心配顔で言った。

「おツボネなら、やりそーつ」とタッチもうなずいた。

男子はみんなマコトの味方だった。意地悪なおツボネさまがやつつられて喜んでる——³ そういうのも、なんだかズルくてセコいよな、と思うけど。

ぼくはみんなの話を黙って聞きながら、マコトの様子をちらちらと横目でチェックしていた。

さっきの視線が気になる。ぼくのこと、怒^{おこ}ってるのかもしれない。でも、しかたないじゃないか、謝^{あやま}ることない、ぼくは間違^{まちが}ってない……と、思う。

マコトは席を立ち、黙^{だま}って教室を出て行った。いつものパターンだ。ぼくもトイレに行くふりをして教室を出た。廊下の柱に隠^{かく}れながら、マコトのあとをつけた。

マコトは渡り廊下^{わた}を通って、理科室や音楽室のある校舎に入った。ひとけのない廊下を進み、階段を上る。最上階の三階の、さらに上——屋上まで。

階段のすぐそばで、^y耳をそばだてると、鍵を開ける声が聞こえた。

あいつ、屋上の鍵をもっているわけ——？

おどろいて、思わず身を乗り出すと、マコトはドアのノブに手を掛けたまま、こつちを向いていた。

ぼくの尾行^{びこう}に気づいていたのか、マコトは余裕^{よゆう}たつぷりに言った。

「ねえ、中村くん」

「……なに？」

「あんたのお父さんの名前って、なんていうの？」

「あ……えーと……」

突然^{とつぜん}の質問に、頭の中が真っ白になってしまった。

すると、マコトは「自分の親の名前忘れてどーすんのよ」とあきれ顔で笑い、「ケンスケっていうんじゃないの？」と言った。

正解。ウチのパパは、中村健介という名前だ。

マコトは「やつぱりね」と笑ってうなずいた。「中村くんのお父さんの子どもの頃の写真、ウチにあるの。あんたにそっくりの顔してるもん、お父さん」

そうだった、ウチのパパとマコトのお父さんは幼なじみで、でもマコトのお父さんは病気で亡^なくなって……。

「いいものを見せてあげる」

マコトはぼくを手招きして、ドアを開けた。薄暗^{うすくろ}い階段に、まぶしい陽射しが降りそそいだ。

チョンマゲを結んだサクランボみたいなボンボンが、陽射しを浴びてキラッと光った。

初めて上った屋上は、予想していたよりずっと広かった。そして、サイコーに見晴らしがいい。

ぼくたちの町を、端^{はし}から端まで見わたすことができる。町の真ん中を流れる朝日川も、山のほうからやってきて海に注^{そそ}ぐまで、まるごと眺められる。川のほとりの、こんもりとした森は、江戸時代にお城があったという中央公園だ。港の魚市場の屋根も見えるし、海岸線のずっと先のほうにはコンピナートの煙突^{えんとつ}も見える。

でも、眺めに感心している場合じゃない。屋上に上るのは校則違反^{いはん}で、ついさっき中山先生にも注意されたばかりで、ぼくは先生に叱^{しか}られたことがないのが自慢^{じまん}の。 なんだから。

マコトはキーホルダーの輪っかを指に通して、「この鍵、お父さんの形見なの」と言った。「お父さんって悪ガキだったから、卒業する前に相棒^{いっしょ}と一緒に合^あい鍵^{かぎ}つくったんだって」

形見——という言葉に、胸がキュツとなった。

「ほらここ」とマコトはキーホルダーをぼくに見せた。プラスチックの小さなどんぐりが二個ついたキーホルダー——どんぐりの一つずつに、名前が彫^はってあった。

ケンスケ。

ヒロカズ。

「ウチのお父さんと、中村くんのお父さん」

びっくりして声も出ないぼくに、マコトは、ああ、そうそう、と忘れ物を思い出したように言った。

「さっきの学級会の司会、あれ、サイテーだね」

鼻の頭を指でピシッとはじかれたような気がした。⁴ なにか言い返したいけど、言えない。マコトの顔をまっすぐ見られない。

「こらあ！ そこでなにやってるんだあ！」

六年生の担任で一番おっかない熊本先生に見つかった。

ヤバイ。でも、ほんとうはホッとした。

小学校に入って初めて先生に叱^{しか}られながら、ぼくはずつとうつむいて、考えをめぐらせていた。

もしも熊本先生に見つからなかったら、ぼくはマコトの顔を見られないまま、いったいどんな言い訳をしていただろう……。

答えは、わからなかった。

（重松清『くちぶえ番長』）

問一 傍線部 X「不意に」、Y「耳をそばだてる」の意味として、次のア～エの中から最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

X「不意に」

ア ひどく

イ 少し

ウ 突然

エ 段々と

Y「耳をそばだてる」

ア 慎重に人のすることを見守っている

イ じつとして音を立てまいとしている

ウ 緊張して身構えている

エ 注意して聞き取ろうとしている

問二 傍線部 1「そこが、おツボネさまのズルいところだ」とありますが、「おツボネさま」のどういうところが「ズルい」のですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア クラスの中の一番おとなしい子を標的にして、意地悪をするところ。

イ 本心は違うのに、言葉巧みに自分の主張を正当化してしまうところ。

ウ 自分がする自信がないことは、他の人に押しつけてしまうところ。

エ 自分の正義感をひけらかし、先生に気に入られようとするところ。

問三 傍線部 2「高野さんから目をそらして、ぼくは言った」とありますが、「ぼく」が「目をそらし」たのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高野さんの辛さを分かっているながらマイク係に高野さんを指名することに、後ろめたさを感じているから。

イ 高野さんがマイク係をすることを納得しそれに賛同しているが、高野さんが下を向いたままでかわいそうだったから。

ウ タッチが高野さんとコンビを組むためマイク係に立候補したことを思うと、何もできない自分が不甲斐なかったから。

エ タッチがいるおかげで高野さんは何も思っていないと思うと、高野さんの無責任さが無性に腹立たしかったから。

問四 傍線部 3「そういうのも、なんだかズルくてセコいよな、と思うけど」とありますが、どういうところが「ズルくてセコい」のですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア マコトにしてやられたからといって、おツボネさまがマコトに仕返しをしようとしているところ。

イ 男子がおツボネさまをやったマコトの味方ばかりして、おツボネさまの気持ちを考えないところ。

ウ 男子はおツボネさまをころよく思っていないのに、他人任せで自分は何もしようとしないところ。

エ マコトが仕返しをされそうになっているにも関わらず、男子はそれをおもしろがってばかりいるところ。

問五 には、「ぼく」がどういう生徒なのかを表す漢字三文字の言葉が入ります。その言葉を考えて答えなさい。

問六 傍線部 4「なにか言い返したいけど、言えない。マコトの顔をまっすぐ見られない」とありますが、それはマコトの発言がどのようなものであったからですか。三十文字以内で答えなさい。

問七 本文においてマコトはどのような人物として描かれていますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父を亡くした悲しみを他人に悟られないように、人目を避けて生きていこうとしている人物。

イ 規則に縛られることなく、他人のことは関係無しに自分本位に生きていこうとしている人物。

ウ 他人に惑わされることなく、自らの信念に素直に従い生きていこうとしている人物。

エ 自分のことよりも他の人のことを優先し、自分を押し殺して控えめに生きていこうとしている人物。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

つい最近、古い友人が小学校四年の時にクラスで出版された作文集を送ってきてくれた。生活綴り方の指導に熱心だった先生が一字一字丹念に刻んだがり版での作文集で、胸の熱くなるほど懐かしいものだったが、そこに掲載されている自分の作文を読んだ時の印象はなんとも奇妙なものだった。

子どものころの写真はほほましいような懐かしさを誘うが、書いた物を読むということは、まるで目の前に少年時代の自分が立っているような、悪い夢のような不気味さを感じさせるものだというのを、私ははじめて知った。

作文の内容は、先生から与えられた正しい言葉の使い方、といったテーマに基づいてかかれたもので、私が床屋の椅子に坐っている、表は雨で、そこへ着物の裾をはしよった田舎者風のおじさんが現れ、バスの「テイリユウ」所のあり場所を尋ねるのだが、そのおじさんはバスをバスと発音するのである。私が子どものころはカバンをカバン、ベンチをベンチ、バナナをバナナ、といったような発音をする人が多かったものだが、私の作文は、そのようなことにふれ、最後に雨の中を去って行くおじさんの背中に向かって、「おじさん、バスではなくてバスですよ」と、呟いて終わるのである。

教師から与えられた抽象的なテーマに A 苦 B 苦したには違いないが、それにしても ヒンジャクな素材をむりやり恰好よくまとめあげようとする少年の小賢しさは、私を うんざりさせるのである。

告白めいた云い方をすれば、この作文を書いていた小学校四年の私も、じつは自分の小賢しさにかなりうんざりしていたはずである。正直云って私は作文が苦手だった。作文だけではない。図画、手工、習字（もちろん敗戦前の教科の呼称だが）などの創造的、あるいは造形的科目のすべてに自信がなか

った。全然だめというのではない。人並み、あるいは人並み以上の成績をとることはできる。しかし、それを越える魅力、または、たとえ C 方破れで点数はわるくても誰にもまねのできない強さをもったもの、つまりオリジナリティ、ないし個性というものが自分にはまったくない——小学校低学年のころから私はそのような絶望ないしジレンマを一貫して抱きつづけてきたような気がするのである。

太平洋戦争が Y たけなわのころ、私は東京の中学から大連の中学に転校した。その最初の作文の時間、教師は私にはじめて見た大連の印象を書くようにと命じた。ちょうど五月の終わり。大連名物のアカシヤの C ガイロジュが花の盛りで、町中がまるで桜吹雪のようにアカシヤの白い花で埋められて大変美しかったので、主としてその印象について書いたのだが、その作文の終わりを「大連の町はアカシヤの花の香りの中に暮らしていた」と、締めくくった。なぜそんなこまかなことを憶えているかというと、私はこの言葉を書きながらなんとなくしろめたかったのである。つまりそれは何かの本で読んだ借りものの表現であって、けっして自分のオリジナルな表現ではない、ということがよく分かっていたし、しかもこの表現をあつ教師ならきつとほめるに違いない、ということまで想像できたのだった。次の作文の時間、はたして教師は私の作文を絶賛した。とくに締めくくりの文書のみごとさを強調し、くり返しその部分を声をあげて読み返すありさまだった。人のよさそうなその教師の顔をながめながら、3 まるで罪人のような気分であつたことを私はいまでもありありと思い出すことができる。

思春期から青年期にかけて誰もが一度はもの書きに憧れるものだが、私はついぞそのような憧れを抱いたことはなかったし、4 芸術家などとはもつとも縁遠い人間だと思っていた。映画の世界に入ったのは確固とした考えがあつたからではない。あちこちの d シュウシヨク試験を受けているうちにたまたま撮影所の試験に合格したという程度である。しかし映画を作るといふ仕事は、脚本家、俳優、カメラマン、美術監督等々、大勢の人間の個性を縄をなうようにまとめあげることであつて、監督の創造的な個性はさほど強烈でなくても十分なしえる仕事である。その意味で私が映画監督になつたということは、わるい選択ではなかつたのかもしれない。

(山田洋次『映画館がはねて』)

(注) ※1 ジレンマ——どうしようもない悩み。

※2 大連——中国東部の港町。

問一 波線部 a、d のカタカナを漢字に直しなさい。

a テイリュウ (所)

b ヒンジャク

c ガイロジュ

d シュウシヨク

問二 A・B・C のそれぞれに当てはまる漢数字を答えなさい。

問三 波線部 X「うんざりさせる」、Y「たけなわのころ」の意味として、次のア、イの中から最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

X「うんざりさせる」

ア 今まで以上に反省に向かわせる

イ 自信がもてない後ろ向きな人間にさせる

ウ 努力が不足していることに気づかせる

エ もうたくさんだという気持ちにさせる

Y「たけなわのころ」

ア 起こりそうなころ

イ 終わってしばらくたったころ

ウ 真つ最中であつたころ

エ 始まつたころ

問四 波線部 1「そこに掲載されている自分の作文を読んだ時の印象はなんとも奇妙なものだつた」とありますが、それはなぜですか。次のア、イの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少年時代の自分の内面と向き合うことになつたから。

イ 思い出したことが本当のことなのかはつきりしなかつたから。

ウ 作文を書いた時の自分が今の自分とあまりにもかけ離れていたから。

エ 本当の自分ではない自分が目の前に現れてきたから。

問五 波線部 2「正直云つて私は作文が苦手だつた」とありますが、これはどういうことですか。次のア、イの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 作文で誰にも負けない成績を取りたいという希望がかなえられないと思つていたということ。

イ 教師から与えられたテーマにふさわしい内容の作文は書けないと思つていたということ。

ウ 作文を書くことに興味が持てず、前向きには取り組めないと思つていたということ。

エ 自分にしか書けないような作文を書くことは自分にはできないと思つていたということ。

問六 波線部 3「まるで罪人のような気分であつた」とありますが、「私」がこのように思つたのはなぜですか。次のア、イの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 教師のほめ方が自分の予想をはるかに越えており、人のいい教師を深く傷つけてしまったから。

イ 書いた人の許可もなしに勝手に表現を借りることは、作文を書くうえで許されることではないから。

ウ 借りものの表現でしかないものを教師に予想通り高く評価され、だましたように感じたから。

エ 転校したばかりなのに教師からほめられて目立ってしまった、周囲の目が気になって仕方がなかつたから。

問七 波線部 4「芸術家などとはもつとも縁遠い人間だ」とありますが、これは「私」がどういう人間だということですか。四十字以内で説明しなさい。

国中平
26

受験番号の欄は左端にあります。忘れずに記入しなさい。

[illegible][illegible]

問七	問四	問三	問二	問一															
		X	A	a															
		問五	Y	B															
			問六		C														
					c														
				d															

号番驗受